

財団だより

# 多摩川

1989.12 第44号



キベリトゲトゲハムシ(ハムシ科)  
キク科の植物の葉に幼虫がみられる。体長4mm。



奥多摩町氷川の本川と日原川合流点「甕れノ多摩川」のカヌー下りスタート地点

## ■多摩川風物誌■

### (15) 塞の神(どんど焼き)

塞の神(どんど焼き)は、すす払いに使った竹を立て、わら等で囲んで作った。子供達は、その中で食べたり、遊んだりした。当日は早朝に火がつけられ、各家から持ち寄ったしめなわ、門松、だるま等も焼かれた。昭和9年に宇奈根で前夜泊りこんだ子供が焼死するという事故がおきてから禁止された。この行事も時の流れと共に消滅していたが、駒井青年会OB(駒美会)の人達の手で数年前より復活し、ジッコ(昔からの人)ばかりでなく新しくこの町の住人となった人達も門松やお飾りを焼いている。1月15日、川仙前の河原で行われている。

61年1月18日、ボーイスカウト狛江市一団発団15周年の記念行事として塞の神が行われた。狛江市にある行事を子供達に伝えようとの目的で行われたもの。17日朝より栗山安正氏(東野川・旧小足立)指導のもと、子供達の手で作った。塞の神の中はいろいろがあり、たみが敷かれ、鍋料理をくるま座になって食べながら、

大人・子供が泊まりこみをした。18日の塞の神には、狛江市の広い地域から子供達が集まり燃え上がる火と竹の爆ぜる音におどろきの声をあげていた。

このように行事を守ろうとしている人達の心が、子供達に伝わり、子供達は自分の住んでいる町の歴史に触れる、時代と共に変化する行事であるが、行事によって季節の移り変わりを感じる子供達であってほしいと願っています。

5年生の2月の国語教材に、伝統行事を調べる箇所があります。1週間近く調べる時間を与え、図書館や地域センター、おじいちゃん、おばあちゃんに話を聞いたり本で調べるように指示しました。これは地域の公共の場所に慣れる意味を含めたつもりで、その点では良かったのですが、どうも聞いて調べたのは2人では出版物からとなってしまいました。

「狛江市に存在した中小河川・用水・清水の調査」

1986年 野村 義子  
財)とうきゅう環境浄化財団(一般)研究助成No.48より部分掲載

## 多摩川散歩

川崎市青少年科学館 増 淵 和 夫

関東山地の1つに源を発した多摩川は、五日市あたりより扇状地を形成し、南東へとゆるやかに流れていきます。多摩川左岸域には武蔵野台地が、右岸域には多摩丘陵などの丘陵が形成されています。

生田緑地は多摩丘陵が沖積低地と接する縁辺部に位置し、小田急線向ヶ丘遊園駅あるいは南武線登戸駅より徒歩15～20分の距離です。

「はげ」に代表されるように武蔵野台地の自然湧水が集まって多摩川へ支流となって流れこむように、丘陵に襞のように刻まれた谷戸からの湧水も集まり多摩川の支流をなしています。台地と丘陵との地形的な違いがあるとはいえ、古来より人々は湧水や支流沿いに生活してきました。今や丘陵の多くは開発の波に押しされ、丘陵を覆っていた雑木林に代って、自然との直接的な結びつきを失った人々の住む家に覆われたり、削りとられてしまっています。しかし、生田緑地にはかつての丘陵の自然を偲ばせるものが残っています。生田緑地を冬の日歩きながら、丘陵の自然とそこに生きた人々のことを考えてみるのも無駄ではないでしょう。

### 長者穴横穴古墳群

丘陵の基盤である飯室層を穿ち、1968年の調査ではこのあたりに計32基の横穴の群在が確認されました。奥行5m、幅3mの奥の広い羽子板状のものが多く、金環、管玉、小玉、銅釧等が出土。7世紀中頃～8世紀後半の築造と考えられています。

横穴群はこの他市内では、多摩川、矢上川、平瀬川などの流域に分布しています。

### 枅形山（枅形城址）

平坦な山頂を持ち、眺望もよくまさに天然の要害といえます。源頼朝が鎌倉幕府を開いた頃、稲毛三郎重成が居城したと伝えられています。また、戦国時代たびたび山城として利用されていたことが古文書から明らかにされています。枅形山の北

80mほどの飯室山の展望台からは、冬枯れの木立ち越しに多摩川、武蔵野台地が見渡せます。戦国時代に思いを馳せるのも、また多摩川左岸、右岸の地形的特徴を確かめてみるのもよいでしょう。

### 広福寺

1185年、稲毛三郎重成がこの地に館をかまえたといえられ、本堂には稲毛三郎重成の木像と位牌が安置され、観音堂奥の五輪塔はその墓といわれています。神奈川県重要文化財の木造地蔵菩薩立像と木造聖観音菩薩立像があり、鎌倉時代の作です。

### 日本民家園

国・県指定の古民家など20件あまりの木造建築物を復元した日本でも数少ない本格的野外博物館。雪の日など丘陵の自然に抱かれるようにして立つ古民家の姿は仲々美しいものです。

### 生田緑地公園

長者穴横穴古墳群、枅形山、民家園は生田緑地公園内に位置しています。公園内には伝統工芸館、青少年科学館もあります。公園の中には散策のコースがいくつもあり、ゆっくり歩けば2時間程丘陵の自然を楽しめます。

帰りにでも青少年科学館に寄られれば、多摩川や丘陵の自然を紹介した展示室をみる事ができます。



「ふるさとかわさきめぐり」川崎市教育委員会(S59.3.31)より転載

## 私と多摩川



「菅の渡し」昭和40年代前半

八王子市用地部長 熊井 知次

私の育った地域は、明治神宮を源泉とする古川の下流部の区域ですが昭和の初期頃には既に沿岸の地域からの雑排水や中小の町工場からの排水で都市排水路化していて、第二次大戦の終戦前後に一時的に綺麗になり魚の取れた事も在った位でしたので、幼時期には川と言えば汚れた臭い水の流れているところしか記憶がありません。

私と多摩川との繋がりには5～6才位（昭和10年頃）から始まったと記憶しています。住んでいた地域が個人経営の商店が密集して形成された商店街で、この内の一軒の人が商売の都合で二子多摩川の傍に移転して私達を多摩川の川遊びに誘ってくれたのが始まりでした。当時の多摩川は今と違って水も綺麗で水量も多く、鯉や鮠（コイ）（ハヤ）（フナ）、鮒は勿論、天然の鮎が遡上したりして魚影も濃かったので、川沿いの地域の人は勿論、都心の人達も東京湾の舟釣りと共に、行楽地として季節になりますと、之等の人達で結構賑わったみたいです。幅の広い平底の川舟に大勢して乗り、川の流に乗って漁師に投網や竿釣りを教わり川遊びを楽しんだ後で、取れた魚を焼いたり天麩羅に揚げたりして貰ったものを酒の肴に宴会を楽しんだものでした。

小学生になってから私の家に勤めていた人が独立して多摩川に近い所に住んでいましたので、自転車で其の家に行けば、川に連れて行って貰い遊んだものでした。当時の事ですから今の様に立派な釣り道具もありませんし、小遣も少なかったので近所の竹藪から切って来た一本竿に竹藪で集めたミミズや浅瀬で採った川虫等の餌を付けたりした何本かを河岸に並べて置いて魚の掛る間に泳ぎしたり蜆を採ったりして日の暮れるのも忘れて遊んでは、夕方になって慌てて自転車で乗って父親の怒っている顔を頭に浮かべながら必死にペダルを踏んで家に帰ったものでした。此の事は後に戦争が激しくなって父親の出身地の群馬の農村地域に家族が疎開したときも、近所の子供達と溶け込むにも共通の遊びがありましたので非常に助かりました。

戦後、暫くは川で遊ぶ余裕もありませんでしたが、川とは縁があるとみえて昭和30年代始めに所帯を持って住んだのが、多摩川中流部の稲田堤の堤防の傍の梨畑の内の一軒家でした。稲田堤は桜の名所で春のシーズンには、堤防に屋台が何軒も並び、夏には京王遊園の花火大会、秋には梨もぎなどの行楽の他に、此の頃は川水もまだ綺麗でしたので、日曜日になりますと、東京や川崎等の市街地の人達が、舟や魚釣りなどの川遊びに大勢の人が集まって川原は賑わったものでした。此の人達が川の両岸の行き来によく使ったのが、漁業組合を中心とした地元の人達が掛けた「菅の渡し」でした。此の渡しは昭和の始めに両岸の耕作の便も含めて掛けられたものでしたが、戦後は川遊びや、梨もぎの行楽の足として利用され日曜日などは橋のたもとで待つ人が出来る位に賑わったのですが残念な事に今は廃止されています。

多摩川の水も、一時に比べますと良くなってきましたので、昔のように川原が家族揃って団樂の場所として復活する日が一日も早く来るのを楽しみにしています。

よみがえ

## 甦れ！多摩川

多摩川紀行

## ③ 氷川～白丸ダム (約2.8km)

## 山道省三

10月8日(日)第2回目の奥多摩カヌー下り。前回(8月末)は小河内ダム直下から川下りできそうな所を捜して、わずか200m程下っただけで、とうとう奥多摩駅まで旧青梅街道を歩くはめになった。今回は奥多摩駅前の氷川神社前の日原川合流点上から下ることにした。水温15.5℃。この日の奥多摩湖からの放流量20t/秒。つい数日前下見した時には日原川合流点では上流からの水はほとんどなかったのだが、この日はかなりの流量がある。それにしても、電車の中でも感じたのだが、ハイキングや釣りを楽しむ人の何と多いことだろう。

午後1時半出艇。岸からたくさんの人が手を振ってくれるのだが、前回の恐怖が頭をかすめて全く余裕がない。空気を入れるタイプのカヌーは腰をおろすと視線が水面に近くなるため、小さな瀬でも波が異常に高く感じる。

出艇してすぐから瀬が続く。川面から見ると両岸に急斜面が続き、全く人工構造物が見えなくなる。それに人影すらない。溺れるという恐怖感はないのだが、岩にぶつかってカヌーが転覆すると、この急流では全てが流されてしまい回収できなくなることが恐い。カヌーが軽く、水の流れに乗ると岸に着けるのは大変な作業になるのだが、たびたび川岸に着けて先を確認しながら進む。このため氷川から海沢川の合流点まで約1.4kmに1時間近くかかってしまった。この間、おじいさんと孫と思われる溪流釣りの二人に会ったのみである。

海沢橋下で右岸から合流する海沢川には、東京電力氷川発電所の水が入っているのだが、本川への流入はさほど多くはない。

狭い谷と連続した瀬の緊張からしばらく解放され、広い川原に立ってみると左岸側のすぐ上を青梅街道が通っていて、ひっきりなしに車が走っている。しかし水面上からは全くわからない。

やっと流れに慣れた所で、一気に白丸ダムまで下ることにした。海沢橋あたりのゆるやかな流れもつかの間、狭さく部と急瀬に出会う。急流でのカヌー操作に少しばかり自信をつけていたし、大きな滝やダムもないことを地図で確認していたので、とにかく流心に乗り水の流れのまま一気に下ろうとした。しばらく行くと川の真中に大岩があり、流れが左右に振り分けられている所に出会った。岩の先はどうなっているか全く解らない。右に行こうか左に行こうかと一瞬迷った。その時はもう遅かった。カヌーはものすごいスピードでその大岩に正面からぶつかってしまった。パドル(オール)で方向を変えようなどとてもできない程の勢いで、まさに水の流れのとうり岩に激突し、カヌーが

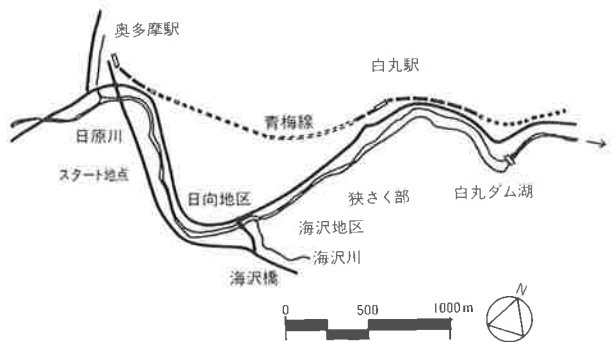
岩壁に垂直に立った。と同時に水流が後から押し寄せ、完全に転覆してしまったのである。気づいた時には、小さな滝つぼの中で必死にもがいていた。たくさんの水泡と揉まれるような水圧の中で、ダメかと思った瞬間体がスーッと水面に浮き上がった。まさにライフジャケットのおかげであった。しかしその時には、カヌーもパドルも着替えを入れたビニール袋もすべてバラバラにはるか下流を流れていた。流れに浮いたまま後を追うのだが、差が縮まらない。下流で釣り人が何やら指さして騒いでいる。釣りをしていたら、いきなり目の前をいろんな物が流れて来たわけだからさぞ驚いたことだろう。その後から人間が浮かんでくれば尚更である。生きてる事を教えるため手を振った。200m程流されもうあきらめかけた所で先を行くカヌーや荷物のスピードが急に落ちた。白丸ダムの湛水域に入ったためである。泳いでカヌーにたどりつき岸まで引いて行ってからははいり、手こぎでパドルや荷物を集めて回った。この一連の作業が終わったとたん、ものすごい疲労感におそわれしばらく湖面で漂っていた。その時はじめて眼鏡を失くしていることに気づく始末だった。

カヌーに乗っていて初めて沈(転覆)を経験したが、わりかし冷静でいられたのも、小さい頃から川遊びをしていた事が、水に対する恐怖心を少なくしてくれたのかも知れない。水の流れに決して逆らわない事が最も安全だという事もすぐ甦えていた。

今回は距離にしてわずか約2.8km、一駅区間のカヌー一行であったが、白丸ダムでカヌーをたたんだ。ダムから下流はほとんど水がない事もあったが、その日はそれ以上下る気力も失せていた。

重い荷物を背負って青梅街道までははいり、白丸駅までの間は車の渋滞であった。歩道のない街道を歩いていて後から追い越してくる自動車の怖さは、たった今味わった川や水の怖さとは全く異質のものであった。川の怖さは納得のいく怖さなのである。

案内図



# 《“多摩川およびその流域の環境浄化に関する” 調査・試験研究” 募集》

当財団は昭和50年から表記研究の公募を毎年行ってきました。既に233件の研究に対して助成金を交付し、170件の研究成果を得ることが出来ました。

平成2年度も引き続き首都圏における「多摩川およびその流域の環境浄化に関する基礎研究、応用研究、環境改善計画のための研究」をひろく募集いたします。

対象者は、研究を専門とする方に限らず、一般のどなたでも研究に意欲のある方でしたら、ふるって応募して下さい。

## 研究について

多摩川は山梨県笠取山を水源とし、東京都と神奈川県の間を流れて、東京湾に至る138kmの一級河川です。その流域面積は、1,240km<sup>2</sup>といわれています。

多摩川を浄化するためには、その流域の環境をも改善しなければ目的は達成できません。

従って、河川や地下水の水質や水量、それらとのかかわりのある生物相や生物群集の研究、多摩川およびその流域の地質、地形などの自然科学的研究だけでなく、土地利用、地域計画、都市化に関連する諸問題、川の歴史や文化、環境観や環境教育など広く自然科学と社会科学にまたがった研究も大いに歓迎いたします。また、治水、利水、親水、流域改善計画に関するあらゆる領域にわたる広汎な研究を期待しております。

欧米に例をみない速さで、高齢化がすすみ人口の過密な首都圏の環境の中で、水域と陸域の統合体である多摩川の河川からその影響圏の環境を見直してみることは、極めて大切なことと考えます。

公募締切日 平成2年1月16日

応募についての詳細は下記事務局までご連絡下さい。  
〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目16番14号(渋谷地下鉄ビル内)  
電話 (03)400-9142 (財)とうきゅう環境浄化財団

## 年度別助成件数・助成金額

年 度	研究 区分	助 成 件 数			助成金額 (千円)
		新規	継続	計	
昭和50年度	A類	47	37	84	123,056
	B類	19	10	29	8,259
昭和54年度	計	66	47	113	131,315
昭和55年度	A類	12	13	25	39,277
	B類	7	6	13	2,673
昭和55年度	計	19	19	38	41,950
昭和56年度	A類	9	13	22	40,974
	B類	4	5	9	2,187
昭和56年度	計	13	18	31	43,161
昭和57年度	A類	17	10	27	38,263
	B類	8	4	12	4,370
昭和57年度	計	25	14	39	42,633
昭和58年度	A類	10	18	28	44,548
	B類	8	5	13	7,836
昭和58年度	計	18	23	41	52,384
昭和59年度	A類	9	16	25	41,818
	B類	4	6	10	6,567
昭和59年度	計	13	22	35	48,385
昭和60年度	A類	15	11	26	44,777
	B類	9	5	14	9,119
昭和60年度	計	24	16	40	53,896
昭和61年度	A類	6	20	26	45,851
	B類	9	9	18	11,585
昭和61年度	計	15	29	44	57,436
昭和62年度	A類	9	15	24	42,704
	B類	6	12	18	9,932
昭和62年度	計	15	27	42	52,636
昭和63年度	A類	10	13	23	24,878
	B類	4	10	14	11,167
昭和63年度	計	14	23	37	36,045
平成元年度 (10月末日現在)	A類	8	12	20	38,652
	B類	3	5	8	9,334
平成元年度 (10月末日現在)	計	11	17	28	47,986
合 計	A類	152	178	330	524,798
	B類	81	77	158	83,029
合 計	計	233	255	488	607,827

※ A類は学術研究、B類は一般研究

## 財団からのお知らせ

### <研究助成報告書完成>

多摩川環境調査助成集（第10巻）が完成しました。内容は下記のとおりです。

### 多摩川環境調査助成集第10巻

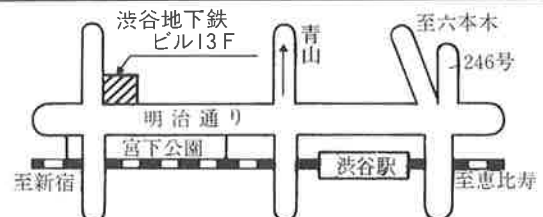
研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
●多摩川の下流における支流や海水の混入について — 川崎市立宮崎中学校科学部の活動 —	青 柳 隆 二	前、川崎市立宮崎中学校教諭
●多摩川上流に生息している小型サンショウウオの生活調査と自然保護について	肥田埜 孝 司	小型サンショウウオを守る会
●多摩川流域における地学の教材化に関する基礎的研究	伊 藤 久 雄	都立大森東高等学校校長
●児童・生徒の多摩川観に関する環境論的研究	山 下 脩 二	東京学芸大学教育学部助教授
●多摩川水系の近世漁労関係史料の収集と考察 (特に秋川水系を中心として)	宮 田 満	福生市教育委員会郷土資料室

### <第一次研究助成選考結果>

第42号で平成元年度(第一次)研究課題の選考結果をご紹介致しましたが、下記研究課題1件(A類)が追加採用されました。

研 究 課 題	代 表 研 究 者	所 属
(A類研究) ●多摩川流域の生態学的環境指標策定のための手法開発	福 嶋 司	東京農工大学農学部環境保護 学科助教授

- ・発行日 平成元年12月1日
- ・編集兼発行 (財)とうきゅう環境浄化財団  
〒150 渋谷区渋谷1-16-14  
(渋谷地下鉄ビル内)  
TEL (03)400-9142



\*印刷所 雄文社 〒336 浦和市常盤9-11-1  
TEL (048)831-8125